

第二の故郷で有終

澤尻選手（北海道出身）スピード成年2種目「銅」

今季引退 八戸に感謝

「支えてくれた八戸の皆さんに4年間の集大成を見せられた。八戸学院大学の澤尻眞里選手は、八戸国体最終日の2日、スピードスケート成年女子3000mで従来の大会記録を上回るタイムで3位に輝き、前日の1500mでも3位と、学生最後の国体で有終の美を飾った。本県成年チームのエースとして地元国体の重任を抱えながらも、表彰台への思いは人一倍強かった。今季限りの引退を決めている28歳は、スタンドの大観衆からの温かい拍手に涙顔で応えた。

ストーリー 永都

八戸スケート国体

北海道芽室町出身の澤尻選手は「夢だった養護教諭の勉強と大好きなスケート両方をできる」と八戸学院大の門をたたいた。初めて親元を離れ、1年生のころは寂しさから頻りに地元に戻っていた。入部当初は目立った選手ではなく、他の選手たちに埋もれた存在だった。長野合宿でリンク20周を滑るというきつい練習に挑んだが、途中で挫折。「こんな優勝を果たした。だが、翌年の国体は1500mが予選で敗退。スケート人生で初めて予選落ちに「どう立ち直ればいいのか分からな



スピードスケート成年女子、3000mが決勝の終了後、レースを見守った関係者に笑顔を向ける本県の澤尻選手（2日午前、八戸市のYSアリーナ八戸）

ムが伸びていった。本県代表として初めて臨んだ1年の国体は、3000mで勝負強さを発揮し準備不足で敗退。スケート人生で初めて予選落ちに「どう立ち直ればいいのか分からな

った」。支えてくれたのは、切磋琢磨してきたスケート部の仲間たち。「大丈夫」「頑張ったじゃん」という言葉に励まれた。大学生生活では自分の競技力向上を図ることも、時間を削りつけては積極的に関係の子ともたちにスケートを指導するなど交流を続けてきた。「八戸のために少しでも役に立ちたかった」

地元国体を見据えた今季、練習メニューを大きく変えた。朝練を追加して氷に乗る時間を増やしたほか、自転車を通じて距離も延ばして体力強化を図った。例年、シーズン後半にかけて調子が上がるが、今季は前半から好調で一度もラップが落ちなかった。昨年11月のジャパンカップでも、3000mで自己ベストを記録して優勝した。上り調子で臨んだ今回の

国体では、これまで表彰台に上がったことのない1500mで得意とする3000mの2種目で3位となった。2日の競技終了後、澤尻選手は「4年間厳しい練習に耐えてきてよかった」と涙を浮かべ、「監督がいなければここまでこれなかった。選手としても人としても大きくしてもらった」と振り返った。船場監督は「4年間でスケートだけでなく、精神的にも強くなった。本当に努力した」とまな弟子の健闘をたたえた。

く、地元国体で花道を飾り「八戸の人たちへの恩返しになったかな」と第二の故郷へ感謝の言葉。そしてこ

う続けた。「いつか八戸の子でもまたちにスケートを教えにまた帰って来たい」